

懺と申すは丸窓乃先

一 信佛と申すは初日七佛供也

又此の心若くは小豆粥と申す

午向は阿と百願也花の巻

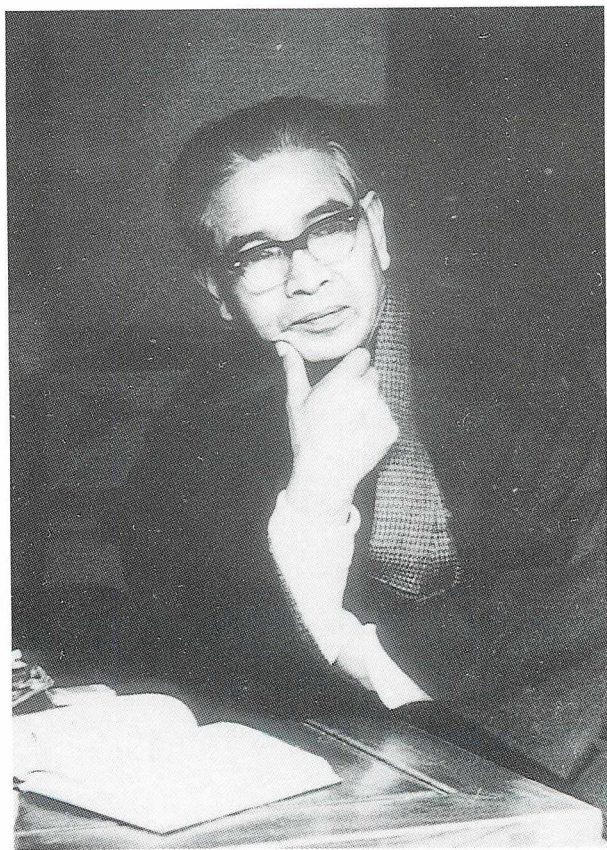
骨 硯 足 春 換

橋本石洲著

正風俳諧

老萊長

神都雲夢園藏梓



著者遺影

淡烟春已過。

神領不詩鄉。

幽夢孤栖燕。

深情兩渡娘。

窓邊聞竹籟。

屋外見巒岡。

守武正風下。

續篇左義長。

俳諧左義長刻成即題

八十三翁

雲 夢 園 主 人

序

伊勢山田雲夢園の主でいられた、石洲橋本隆介翁の風雅の掉尾を飾る『正風俳諧左義長』が世に出されようとする。俳諧をこの道一筋と辿られた翁の生涯を想い、その心情のまことをば貫かれた詩心を窺うとき、深い感慨を覚えずにはいられない。

翁は弱冠より尊父に文芸の山口に導かれ、天性の詩魂に促されてこの道に入り、早苗庵汀鷗より正風伝統を踏む立机を允許されたのは、はやく二十歳のことであったという。その連衆の捌きに骨髓より油を絞られた成果は、ようやく昭和三十一年『芭蕉の雫』に連ねられて世に問われた。さらに十五年の歳月を閲して独吟へと移り行く俳境は、昭和四十六年『陽田の土』に芽ぐみ初める。ここに、その俳風を宣揚されようとする情熱をもって、次々に巻かれた独吟が『正風俳諧新秋津洲』に成ったのは、それよりもなお九年を経た昭和五十五年のことであった。いまや完尾の連句は百五十余巻を数え、翁の風雅も極められたものかと思われた。

翁が世を去られてより四年を経て、遺品の内の木賊色の縮緬風呂敷に包まれた一括の稿本を拜見できた。用紙こそ反故の貼り混ぜではあったが、手ずから一冊に製本されたものと知られて、紛れもなく句集としての体裁が備えられている。それは、もはや世人は顧みることのない対象も新しく蘇らせるといふ、俳人としての心構えを如実に示されたものであり、そのかみの守武千句の草稿等を知る者にとっては、伊勢の地に生きる俳人のなかに脈打つ、一つの貴重な精神に思いを致させるものであった。生涯の最後の時を迎えられるまで、己が俳統を世に伝えようとされた、翁の心願はここによく窺えるであろう。

四十巻の独吟を収めた本書に展べられた風雅は、どのようなものであろうか。翁の八十歳の正月に巻かれて書名に採られた「左義長の巻」は、外宮北御門に設けられる豪快などんど火の感興を盛って発句とする。翁にとって伊勢神宮鎮座のこの地が、どれほどに高く誇りとされるところであったかは、ほとんど余人の想像を許さないものがある。その心操は、ほぼそのまま外宮祠官年寄師職ならびに伊勢山田奉行所御旗本支配組頭を勤められた、家門の誇りと重ね合わせられるものであったと見てよい。翁の俳諧は、その誇りに支えられて世人から屹立する、

正風俳諧の指導者という峻厳なる自負に立つものであったと言ふことができる。

このように言つても、翁が風雅一筋に遊ばれた老境の至純の心情は、二季村田氏美氏の座敷に入つてこられるなり、たちまちに始められた対話の弾んだ調子にも回想される。いま、いよいよ鮮やかに蘇ってくる在りし日の翁の風貌は、その俳諧のなかで常に変わらなかつたものの面影と正しく重なり合う。それは、軽やかな筆致によって暖かい気分のもつとして描かれる、それぞれに独立して行かれる家族への愛情や、身近な人々に誘われて巡る旅の先々での感懐や、日々に見聞する市井の出来事への関心などにほかならない。この俳境こそ伊勢の俳諧に独特の色彩を与えてきた、この地に固有の感情ではなかつたかと思われる。

しかし、時は移り行き人も去つて帰らない。翁が伊勢の地を離れて身罷ろうとされたとき、その胸中を去来したものはなになつたのであろうか。「寒波の巻」に密やかに披瀝されている静かな諦観は、翁に深い感懐を催させた巨大などんど火の浄火が、時に激しく吐露されたそのかみの同志への強い感情を燃焼し果せ、限らない郷愁として再生させていると見えるのである。風雅の興の尽きるところの哀感を湛えた翁の独吟を前にして、昭和の御代の伊勢の俳壇の活況

を偲べば、正風派として名を連ねられた先人への哀惜の情はいや増すものがある。

神と人との唱和に発するとされるこの文芸は、伊勢神宮の神官のものとして、遙かな室町の代の厳しい世相のもとに神事遂行を祈念された、荒木田氏経脚の独吟千句という先蹤を持つ。しかしながら、連衆一人一人が潔く独立しつつまた相互に深く依存する、円居の親和のうちに一巻を成就することを生命として、後代に至ったことは言うまでもない。久しく筑波に在って、故郷の俳諧の現況について知るところがないが、この文芸の伝統を受け継ぐ伊勢の地の俳壇が、世界にも希なその美風を称揚することによって、地方の時代の文運に先駆けて、一層の活況を現出されるよう願われてならない。

翁の四男であられる橋本宣彦氏が、遺志を体して本書を世に送られる。この時、翁に一日の知遇を忝なくしたに過ぎない若輩の身として、固辞すべきところをも敢えて拙文を綴らせていただく。素志の存するところを、風雅の好士に御賢察たまわらんことを念じつつ。

平成二年九月 秋霖閑庭を沾すの日 筑波の寓居にて

石洲師翁を忍びて

師翁の在りし日を思い出し、浮かぶが儘に書いてみる事にする。知り初めて四十路余り、連歌に夜を徹したのは戦後二十一年から三十五年まで、私の事務所への来客や友人を捉えては、時・所をかまわず、あんな警察の署長さんかん、部下も沢山あるんやで、こんな文は読めるやろなあ！ この連句に下の句付けてみんかな！ と誰彼なしに詰問したりするため、人々は感情的になるのか、近寄り難い存在であった。そのため親しくする人も少ない、へそ曲がりの私ぐらいであった。私に、君は俺によく似てるのう！ と言っては常々、連歌の付句や俳句のことで口喧嘩すると、どちら也讓らずの気性であった。師翁と両吟歌仙連句の付け合いに對し、スムーズに運ばれないと晩に考えて来いと言われ、二十句乃至三十句作って持つて行くが、気に入らぬと全部朱線を引き、突き返しもつと考えて来いと教えず、何度でも簡単に命ずるのであった。ある日腹立ち紛れに、もう隆やん、あらへんわ……と言うと、腹を叩いて笑い、もう

無いて、お前ぐらいや無いことあるか、どれだけでもある、ようせんなら教えてと言え、と言
うので教えて！と言いたくなくとも言わせたのである。懸瀑の石頭に立ち寒月を眺める如く、
詞韻雄文こそ八斗の師翁で常に詩仙を仰いで来た。

あるとき、伊勢市の有力者、慶谷市長達（寅年）が同窓会を催すに当り、国会議員の浜地文
平氏を招いた。その高閣に掛かる扁額を見て誰一人として読めるものはない。ある一人が橋本
君やないと解らん、隆やんこれなんと読むのや？と尋ねた。誰が書いたんや、それも読めんの
や、お前等の解らん奴なら大した大物でもないのう！どれく、下手な字やのうと言ったと
き、浜地文平氏が突然、橋本君たいがいにしとかんか！と言った。師翁は頭を搔きながら、
済まんく、これ皆の衆よ上座のお方の眞筆じゃ！と笑わせたそうである。師翁は何処に至っ
ても先ず文筆を見て格式を知る事じゃ！と私に教えた。あるとき、日本の大人（元総理）に
書いて貰ったと喜んで色紙を見せた。師翁はこうゆうものを人に渡すのは学のない奴や！と
一蹴、貰った仁は驚き、どうゆう訳でと聞き返す、「寿終」これは「生命がおわった」と書い
てあるのや、あんたの生命は尽きたという意味さ、なんでやな、終の字はこの脩やないといか

んのさ、何と読むのやな、解らんかな「生命ながし」と言うのさ、と教えたそうである。

明治末期から俳句をよくし、大正時代から六十年余りに亘り、俳誌「松の葉」発行する中村古松宗匠と師翁は交際を続け、折々会員の選を依頼されるが、幼稚っぽく一度も選をした事がないと言う、記念句集の選を依頼あっても南天君お前してやれよ、と言うので私も二、三度代理を勤めた。俳句の代選なら良いが、古松さんが日本中の知友宗匠に頼み、画仙紙に達磨を画いて貰い、一番最後に師翁の処へ切願あり、私にこれ画いて送ったって呉れと渡された。絵は全くの苦手、それも最初なら失敗しても紙を買えば済むが、諸々の宗匠が折角画いたものを万一画き損ねたら一大事である。兎に角、類の無い達磨を考え、眞上から見た達磨を画いて送った処、これは珍らしいと喜んでもらった事もある。

昭和三十年春、度会郡小俣町湯田、湯田神社宮司である小野短平（号巨竹）氏が石洲宗匠を訪ね、兼々念願である連歌の指導を申し出た。だが石洲宗匠は連歌指導する事に飽き／＼していたのであろう、外宮に株式会社神都復興工業社という会社がある。その事務所に門弟である前田南天さんが居るから指導してもらいなさい、私が申したと言いなされ！ と聞いて来場し

たのである。本職忙殺の中、一年六ヶ月余り教え両吟歌仙二巻の満尾に、巨竹氏は大変喜んだ。書けば尽きることを知らないが、夜師翁を訪問すると、これお前の分やで全部吸うまで帰ったらいかん！ と煙草を止めて十年もなる私に二十本入ったものを強制的に渡すのがならわしであった。それ程、師翁は愛煙家で、遂尻に根が生え夜が明け、鶏鳴を耳に朝帰りした事も屡々あった。

万事何事も出来る学に長けた人の言や文筆など、社会では名士や商人達は己より出来る人を妬ましき、まゝ無視するものである。出来なくても出来る顔したい、つまらぬ根性の持主が多いのに驚く、外観なぞどうだって良い、中味が大切ではあるまいか。道は師なりと崇める事を知らない、社会の現実には心ない嘘や要領のよい者が浮ばれる、それに反し師翁は人の中で冗談が言えない、真っ正直そのもので社会という橋を渡るには損あり、その事を知り乍ら冗談や上手言つて己の人気を得る人ではない。それは純潔ゆえであろう。唯塵外に在つてその道に没頭あるのみの人であった。前田君、つまらない事に心惑わされず、学に寸暇を惜しめと常に言つた。師翁を人を頭ごなしに扱うとか、無作法だと言う人こそ、師翁と秤に懸からぬほど文学に

大きい隔たりがあるからであり、毛嫌いされようが淡々とし去るものを追う人でなかった。古文や文字、其の他解らぬ人は深更でもタクシーに乗り遠隔より尋ねに来る。書、漢学、連歌、和歌、俳句、川柳等々、師翁の右に出る者なしと私は断言する。我田引水だろうか。論より証拠、作品を見れば奥の深さが解ろう筈、だが師翁の作品を理解出来る人は、学者以外少ないのでは？ それ程に手の届き難い詩仙であり、惜しいお方に先立たれ私は生ある限り、思慕に痺れて暮れる事でしょう。筆は先走らんとするも尽き難くこの辺りで。

平成二年 夏

三峰庵 前田 南天 謹みて識す

師翁逝去の一月二十一日ハ禁裡仁寿殿に於て文人に題を給わり、詩作を、御前で披講する節会を内宴と云う。

香墨の惨む詩魂や雪の深更

今日は内宴儘ならぬ旅

南天

影

前田南天

笛鳴の梅ヶ香慕う御師の庭

虹かゝる朝熊岳へ急ぐ誰が影よ

思慕の胸疼くよ霜葉散るさへも

雪を積む音は師翁の足音とも

玉骨の香に抱かれいし実南天

正風俳諧 左義長 目次

俳諧左義長刻成即題四十字

序 文 …………… 筑波大学教授 奥野純一

石洲師翁を忍びて …………… 三峰庵 前田南天

正風俳諧の醍醐味 …………… 1

獨吟歌仙行 …………… 21

和漢行 脇起幟の卷 …………… 23

和漢行 雪嶺の卷 …………… 26

麥秋の卷 …………… 29

露の卷 …………… 32

瀧紅葉の卷 …………… 35

| | | |
|-----------|-------|----|
| 紅葉の卷 | | 38 |
| 寒の卷 | | 41 |
| 師走の卷 | | 44 |
| 左義長の卷 | | 47 |
| 初東風の卷 | | 50 |
| 漢和行 鶯の卷 | | 53 |
| 漢和行 紅梅の卷 | | 56 |
| 漢和行 山笑ふの卷 | | 59 |
| 漢和行 朧月の卷 | | 62 |
| 青田の卷 | | 65 |
| 梅雨の卷 | | 68 |
| 和漢行 蟬時雨の卷 | | 71 |
| 曼珠沙華の卷 | | 74 |

| | | |
|------------|-------|-----|
| 薰風の巻 | | 113 |
| 萬緑の巻 | | 110 |
| 残雪の巻 | | 107 |
| 冬雨の巻 | | 104 |
| 稲妻の巻 | | 101 |
| 五月の香の巻 | | 98 |
| 花の巻 | | 95 |
| 蓮華田の巻 | | 92 |
| 和漢行 御連歌始の巻 | | 89 |
| 冬燈の巻 | | 86 |
| 萩の巻 | | 83 |
| 漢和行 大祭の巻 | | 80 |
| 菊の巻 | | 77 |

正風俳諧左義長 目次終

| | | |
|-----------|-------|-----|
| 水無月の巻 | | 116 |
| 青葉の巻 | | 119 |
| 伊勢菊の巻 | | 122 |
| 凧の巻 | | 125 |
| 初懐紙の巻 | | 128 |
| 雪解の巻 | | 131 |
| 夕月の巻 | | 134 |
| 寒波の巻 | | 137 |
| 和漢行 家の春の巻 | | 140 |

正風俳諧の醍醐味

正風俳諧の醍醐味

昭和五年の彌生のもなか、京の空は相變らずどんよりと曇り、毎日のやうに細雪が降つて居ました。そんな或る日、私は京都女專の田中健三先生の紹介で、京都帝大の頼原退藏先生にお目にかゝりました。場所は丸山公園の「芋棒」といふ、洒落た料理屋の奥座敷でした。

先生は連歌・俳諧の研究者として夙に令名あり、芭蕉七部集各巻の歌仙行に就いての御高説を拜承、又「俳諧史の研究」の原稿をも見せて頂きました。私は私自身、連歌・俳諧の實作者の立場から「實作者の意圖を度外視する評釋は、正確な評釋ではない」といふ持論を不躰に話した事でした。先生はその時「實作者の意圖と評釋者の推測」に就いて熱つぽく話されましたが、五十年前のあの一徹なお姿が、今猶はつきりと浮んできます。

正風俳諧の味はひ方、所謂、さび・しをり・ほそみ等は實作者でなければ、ほんとうに分ら

ないものだと思ひます。明治・大正を経、昭和へ入るや、正風俳諧の研究は活潑となり、新興の意氣も雄々しく、實に眼を見張るばかりでした。

東京の天野雨山先生は昭和六年二月に「昭和連句総覧」第一編を上梓して世に問はれましたが、歌仙行の漢和・和漢はまだく推敲不足で、大方からうけた玉石混合のそしりはまぬがれませんでした。この事に就いて漢學者でもあつた武藏の井田楓園先生は、鄭重な御手紙に添へ該「昭和連句総覧」の内容に対して、辛辣な批判を下され、私の意見をも求めてきました。即ち

天野雨山氏編昭和連句総覧出版募集の廣告に接し、故猪爪菊外宗匠の「菊の葉」と題する句集の類ならんと推考して應募もせず、然るに此頃俳友より惠贈ありて之を閲するに、玉石混合の觀あり、自分は還暦過ぎて親友の勧めに困り斯道に志し、爾來餘生消閑の慰として、日々の文音を唯一の娛樂とす。素より晩學未熟、往年某々宗匠より立机を慫慂せられしも、老齡不學のため現状維持を主張し、その好意を辞退せり。本集中敬愛すべき大家宗匠の作品も多々あり、而して又去嫌の規則さへも無視したるもの往々見受けらる。就中

清水東枝・岩溪半風兩氏の二卷の如き、所謂棒槌的漢和・和漢にして、珍無類の形式と謂ふべし。我等淺學、芭蕉時代の俳諧は勿論、現今にも尚見當らざるべし。東枝氏は先代雪中庵主にて世の知る處、又半風氏は漢學専門の大家岩溪裳川先生なり。若し兩氏が昭和現代の漢和・和漢は、如此して可ならんとの見識にて、該形式を示すものとせば、芭蕉俳諧を顕揚せんと主張する門戸は潜るに及ばず、潔く新派の名乗りを揚げ、旗印を鮮明にするを要す。議論は理屈の付け様なりと雖も、雨山氏に於て芭蕉俳諧否正風俳諧顕揚するに果して忠實ならば、假令私交上如何なる情誼あるも、採録を拒絶して可なり。豈加入者の多きと、紙數の殖えたるを誇るに足らんや。雨山氏は巻頭に於て、推敲の不足や習練の不熟から、輯録に際して考へさせられる作もないと自白せり。而して又玄關口のみでなく、亂雑なる勝手口を見るも參考ならんとの意味を洩らす。倘然りとせば、玄關口と勝手口の部門を區別し、一目瞭然たらしむる要あり、然らざれば啻に芭蕉俳諧否正風俳諧顯揚に、忠實ならざるのみならず、所謂二枚舌にして何か爲にする所ありと評せらるゝも、敢て誣言と謂ふを得ざるべし。我等斷じて羊頭狗肉の所爲也と云はん。先生以て如何とな

す。請ふ高識を垂賜へ。

昭和六年七月念日

ながらへて憎まれ口を柘榴かな

楓園

とあり。早速私は楓園先生と同感の旨を傳ふべく、一見異体なるは論を俟たず、古書にもその作例は皆無、珍無類の形式なりと論じ、別に歌仙行による漢和・和漢に関する一文を草して差上げました。

楓園先生と私との兩吟歌仙は、昭和六年六月の「蝸牛の巻」と、同年七月の「風鈴の巻」、それに同八年の五月の「和漢行三吟初職の巻」の計三巻があります。(注||昭和三十一年九月刊芭蕉の雲抄)又、楓園先生が昭和七年九月に、豊後の上田鷹居先生や、讃岐の山口半仙先生やと巻かれた「漢和行三吟踏月の巻」と、同八年五月に前述の遠江の松本翠影先生も加はる「和漢行初職の巻」があり、何れも規則どほり運んで居る兩巻は、参考のつもりで茲に掲載しました。

漢和行 三吟踏月の卷

昭和七年九月

踏月斜崖路

鷹居

手に持つ籠にあまる初茸

半仙

季秋遷別宅

楓園

日頃列中農

居

群千鳥啼く音も遠き汐干潟

仙

雪戴ける三蓋の松

園

推敲の孤平にとんとあぐみはて

居

聖堂報午鐘

仙

齟齬時寝轉

園

嫁ぎて見ねば知れぬ吉凶

居

姑を家の舵とは誰が言ひし

仙

祈らぬ神の恵み重なる

月出奇峰崩

涼風萬緑濃

繪行脚の一人寫生にいそしみて

堪笑老僧慵

とりかゆる瓢の紐も花用意

春夜事裁縫

暖ナカかになれよくと雨降りて

風俗目立つ水戸の舊封

贅櫃をとりまく注連も嚴に

山路白雪蹤

眞是子昂筆

圍爐向酒冬

仙 園 居 仙 園 居 園 仙 居 園 仙 居 園

年末の賞與があてになるものか

邂逅愛嬌容

仇とも知らず身の上打明けて

決然定度胸

荒波を浴びしともなき洋の月

雁啼く方に小さき不二の峰

焚^ナ飯零餘子

仕官不曲従

避紅塵晏々

つきへらしたる實竹の筈

水與花相映

彌生の景色此處に鍾る

居

園

仙

居

園

仙

居

園

仙

居

園

仙

— 滿尾 —

和漢行 三吟初轍の卷

昭和八年五月

武の譽文の榮に初轍

石洲

梅檀放馥庭

翠影

袴客礼儀作法もわきまへて

楓園

さもうまさうに菘吸ひけり

洲

風前孤月黄

影

露下數峰青

園

唧唧蛩聲逼

洲

臍線金は遣ひでのあり

影

貧すれば鈍する誹り免れず

園

抹香臭き十二因縁

洲

穎才加美貌

影

情事 撼鸞鈴

凛々と雪の晴間を冴ゆる月

老樹にひそむ木菟つくと梟ふくろう

團友は薬もいらぬ旅果報

便知萬物寧

風状花影夢

日麗醉眠醒

割ナボ盆の草餅少し干ひからびて

耕す小田の水加減よき

鎌倉は古跡さも多の處とや

見上ぐるばかり千年の松

老來崇佛説

新婦敬神聽

園 洲 影 園 洲 園 影 洲 園 影 洲 園

郷曲稱貞晦

急ぎの用は飛行郵便

偽筆優眞筆

風流訝鏡銘

月明如白晝

露もしとゞに秋の七草

餌を乞ふる腫愛かなしき鹿の群ナウ

鐘韻入窓櫺

詩堪輕富貴

時に刀の鐔を文鎮

色も香も世々に傳ふる花なれや

春光造花靈

洲 園 影 洲 園 影 洲 園 影 洲 園 影 洲 園 影

— 滿尾 —

歌仙行の規則として、漢和の時は表六句目と一卷の擧句は和なり。和漢の時は表六句目と一卷の擧句は漢なりと古くから示されて居ますが、前句の趣向によつて變化する場合もあり、是は老練による「格に入り格を出す」といふ事でありませう。

守武の獨吟千句を繙く時、芭蕉の七部集を繙く時、蕪村の桃李を繙く時、正風俳諧の醍醐味といふか、さう云つたものがひしくと胸に迫り、溢盛な創作慾を驅立てゝくれます。私が同好者所謂連衆に於ける應酬制作の百韻六卷・歌仙九十卷を集録し、「正風俳諧芭蕉の雫」と名付け刊行したのが昭和三十一年九月でした。當時近江神宮の宮司であられた平田貫一先生の御助力は計り知れず、甲南大の伊藤正雄先生も次の如き「序文」を寄せて下さいました。即ち

俳諧の連句は、日本文學中でも特異な存在である。それは芭蕉の天才によつて高度の藝術に洗練せられ、世界にも類のない一種獨特の民衆詩として完成を遂げた。連句の生命は、變化と調和との美しい交響樂たるところにある。一座の人々が、各自の異なる個性を十分に生かしつつ、しかも他の個性と常に溶け合ひ、助け合つて、渾然たる一個の全を圓成する。連句の精神は、とりも直さず人間處世の精神であり、社界生活の精神でもある。

これは普通の和歌や俳句に無く、その他世界の如何なる詩歌にも絶えて見られない獨自の性格である。この日本的藝術が明治以後衰微に赴いたことは、何と言つても寂しいことであつた。

神都は四百餘年の昔、俳祖荒木田守武神主を生んだ、俳諧發祥の地である。爾來累世風流文雅の士が輩出して、地方俳壇の冠驕たる地位を失はなかつた。橋本石洲氏は、この由緒深き神都の名門に人と爲り、多端な家業に鞅掌される傍、弱冠より風雅の志深く、稀有の熱心さと拔群の技倆とを以て連句道に精進されること、實に三十餘年の久しきに及んだ。この度その半生にわたつて同好の士と唱和された、百篇に垂んとする佳什を集めて一書とし、「芭蕉の雫」を上梓されるに至つたことは、まさしく伊勢俳諧の輝かしい道統を現代に復活せしめたものと言ふべく、連句道不振の時代において、まことに空谷に磴音を聞くの感を禁じ得ない。願はくはこの「芭蕉の雫」が遍く世に流れて、新しい俳諧の根を潤し、更に美しい風雅の花を咲かせる力となることを切に期待するものである。嘗て職を神宮皇學館に奉じ、今なほ神都文運の發展を祈るもの一人として、大なる喜びに耐へず、あへ

て拙い一文を草して、巻頭を汚すこととした。

昭和二十九年十月 芭蕉忌の日に

甲南大学教授 伊藤 正雄

私の正風俳諧、所謂、伊勢俳諧に関する主要著書としては、この「芭蕉の雫」と昭和五十五年八月刊行の「新秋津洲」でありますが、「新秋津洲」の方は全部私の獨吟で百韻二卷・歌仙五十五卷を年代順に掲載しておきました。

俳諧の獨吟と云へば、伊勢では室町時代荒木田守武の「俳諧独吟百韻」「千句飛梅の卷」「千句秋津洲の卷」と江戸時代杉田望一の「百韻鶯籠の卷」「千句姫はじめの卷」と大淀三千風の「吟三千句」等があります。伊賀の松尾芭蕉、攝津の與謝野蕪村兩者とも獨吟に心は動いたとしても、結局は一巻も遺して居りません。私はこの「新秋津洲」を刊行早々神都出身であり、大作「伊勢神宮神官連歌の研究」の著者でもある、筑波大學の奥野純一先生に一部贈呈しましたところ、次の如き御手紙をいただきました。即ち

毎日厳しい暑さが續きますが、先生にはますます御清祥の御事とおよろこび申しあげます。その後は雑用の多い生活にまぎれ、すっかり御無沙汰いたしておりますが、何とか元気にすごしております。

さて先日は大著〔正風俳諧新秋津洲〕お送り下さり、まことにありがとうございます。さつそくお禮をと念じながら、靜かに拜讀すべきものと考え、今日に至りました。さて本書を拜見し、まず、百韻二卷・歌仙五十五卷の俳諧に、解説論文二篇・附録愛染華抄・詩鈔を加え、三百四十一頁の浩瀚なる一冊であることに壓倒されました。

またそれら各卷が、ほぼ二十年の永きにわたる御精進のあとを證するものであるとともに、大半が七十歳をこえられてからの御詠作であり、とくに四十八年・九年、五十四年・五年の四年間の巻きぶりは、先生の老來ますます御感興の高まりゆくさまがよく窺われ、まことにうらやむべきであります。

俳諧式目について知識に乏しく、付合や見渡しについて、古來の作品鑑賞が不足しているものですから、御作の批評などおこがましく出来ません。また漢詩の方面は全く不案

内のことゆえ、詩鈔はもちろん和漢・漢和の作品についても、その風趣をよく解するところではありません。

形式の上では、百韻・歌仙ともに、殆んど全てが獨吟であり、俳諧に式目あつて、また、よくそれを解する先生なればこそ、立派に一巻が満尾を得ているわけで、あらためて式目の力の偉大なることを教えられます。先生の詩囊の特徴は、先祖へのあつい崇仰であり、子孫へのこまやかな愛情であり、また純乎たる戀情でもあり、將又日常生活にみいだす風趣、旅の風光への深い感興にあると拜見します。

なかに世相に対する獨特の批評も交えられていますが、それらすべてを通じて流れる詩情は、流行にして不易なる人情の最もよきもの、つまり平穩なる人間と自然にたいする親和の感情ではないかと思われまゝ。そしてこれこそ伊勢俳諧に應わしい詩精神であると信じます。

百韻・歌仙を通じてそれぞれに結構だと思われまゝですが、試みに歌仙から十巻を選ぶとすれば、花の色の巻・逝く秋の巻・新涼の巻・彼岸花の巻・初日の巻・日に炎えての巻・

花の香の巻・牡丹の巻・葵の巻・迅雷の巻が好ましいように感じましたが、いかがでしようか。

百韻では、秋津洲千句の發句による霞の巻がさすがに力作と感服いたしました。獨吟の百韻は句境の展開をはかることが大變むつかしいことと推察いたしますが、この一卷はその點まことに見事なものと納得いたしました。その他、すべて和漢・漢和もあわせ、老いてますます詩興の盛んなることが如実にしめされたものと感嘆いたしました。それにしましても、昭和十八年の粽の巻の好もしさ、また石洲・窓月兩吟のきわだつた個性、石洲・窓月・信道・南天四吟の運びの妙など、まことに伊勢俳諧の水準を伝える立派な作品であり、本書にお納めいただいた結果、後世に残ることとなり、まことに有難いことだとお禮申しあげます。ともかくも、かねてお伺いたしました俳諧集、伊勢連俳史に由緒も深くたつとい「秋津洲」なる名を冠した一書はいま目出たく完成されましたこと、まことにうれしく、心からお喜び申しあげます。

さきにも書きましたが、式目や付合の知識に乏しい身ゆえ、せつかくの御勞作の眞價を

十分に理解できない恨みを抱いております。又機會を得ていろいろ御教示賜わりたいものと念じております。

どうか先生、今後ますます御壯健にて、句境のますます深められますようお祈り申し上げます。

なお、本書完成をお祝いして、当地の銘酒をと考へましたが、とりあえず無しつけながら金一封を同封いたしましたので、お納めいただきませう、お願いいたします。

昭和五十六年七月二十七日

奥野純一

橋本石洲先生

とあります。文中奥野先生も指摘して居られるやうに、荒木田守武を軸とした正風俳諧所謂伊勢俳諧の呼稱は、室町時代・江戸時代を通じ、もう既に天下に鳴り響いて居りました。「俳諧とてみだりにし、笑はせんとばかりはいかゞ、花實をそなへ風流にしてしかも一句正しく、さてをかしくあらんやうに」これが守武の主張した本音でありました。寛永の初め頃、「ほこ長

し天か下照る姫はじめ」を發句とする杉田望一の「獨吟千句」は堂々たるもの、序文に「御裳濯川のながれの末、豊川の邊りに泥龜どんがめ一つうかれ出て、荒木田の雁の飛跡をしたひ、守武神主此道の千句始めて仕りたまひしかば、其聲を傳へ聞き、我もとてすつぽんく」とはつきりその傳統繼承を宣言されて居ます。

匂ふかに御連歌始伊勢派なる

石洲

(附記)

「伊勢神宮神官連歌の研究」に關する奥野純一先生の消息

拜啓 初秋の候、先生にはますます御清祥の御事と拜察申しあげます。

さて、小生かねてより斷續的に手がけてまいりました、伊勢神宮神官の文藝に關する調査を、今度「伊勢神宮神官連歌の研究」として、小著にまとめました。研究と題して、その實、まことに未熟な、いわば中間報告としてのまとめで、汗顔の至りでございますが、一書呈上申しあげます。

連歌の部分につきましても、研究の不行届きは少なくありませんが、とりわけ和漢・俳諧の分野におきましては、全くの門外漢のこととて、浅薄なまともにとどまり、先學の御業績に対する失禮の段など、多々ございますことを恐れております。ただ、今後とも伊勢の地の俳諧を中心とした文藝享受の研究を繼續し、本書の缺点を補いたいと念じておりますので、ぜひとも嚴しい御叱正・御教示を頂戴いたしたく、お願い申しあげます。

昭和五十年九月一日

奥野純一

橋本石洲先生

獨
吟
歌
仙
行

和漢行 脇起幟の卷

昭和八年二月

名門に嗣ありて立ちし幟哉

小波

榭餅供朝陽

石洲

疊はる遠つ山脈仰ぐらん

噴井の水の澄み透るなり

宵闇鈴蟲健

草菜玉露香

誦すべう世の中百首守武忌^ッ

突く鳩杖は祖父の賜物

足利期守護使不入も薄らぎて

燈下督占方

錦衾京國夢

逢引板橋霜

五更伴凍月

矢張番犬矢鱈吠えつく

権横の御用飛脚は長崎乎

落着きたくも落着けぬ尻

花裏水風靜

彩霞天地康

^{ナキ}ねもごろの若鮎料理鮮やかに

今も明治の紅べにと白粉

想君還客棧

憐汝是他郷

晚來梅子雨

殘鶯隱る氏神の杜

年毎に政局危惧が高まりて

野黨不竝常

うつし世は實まこと三分と虚うそ七分

都山流にや尺八の音

月輪棲閣頂

紅葉鏡池傍

白蘇ナラ稱菊酒

不斷は髻の袋外さず

ませ垣の繕ひかゝる昨日今日

小雨も止みて空の晴々

花候千峯聳

麗春萬象昌

—— 滿尾 ——

註 東京都の巖谷小波翁ホ句による右一卷は前著〔正風俳諧新秋津洲〕に掲載洩れのため、改めて發表する事としました。

和漢行 雪嶺の卷

昭和五十六年二月

北伊勢の藤原岳にて

雪嶺や池段々に鱒を飼ふ

石洲

寒深晝尚幽

俳諧の翁の里曲訪れて

笠もそのまゝ杖もそのまゝ

疏樹半宵月

斷雲孤雁秋

幸あれと菌料理の土瓶蒸し

情重さを荷ふ海老腰

閨裡同心結

帳中寤寐求

あなかしこ伊勢神宮へ御代參

鑿川萬古流

月升涼不盡

風過暑難留

國擧げて道路新設擴張に

名所舊蹟こぼつ空しさ

花外輕烟抹

はるか飛交ふつばくら燕の群

ナオ八講の比良まだ冷の氣色して

ふたみち二道兼ねる謎が分らぬ

愛しけれ温泉ゆの香移り香人妻に

玉章繞指柔

冬枯己離影

雪松方若邱

ロッキード五億の金のありどころ

疑惑の^ま的は前の宰相

亂搖憂世態

いみじく清きコスモスもがな

新月迎江嘯

早蛩帶露収

秋^{ナウ}郊三兩戸

目張り忘れぬ糠味噌の壺

日東の李白誰をし云ふやらん

まだきの内に響く拍手

満花残夢淡

春麗土風優

——満尾——

麥秋の卷

昭和五十六年四月

伊勢なる船江の里にて

美しくも乙由の頃麥秋乎

石洲

卯月御空の大きい白雲

窓の外潮の香淡くうつろひて

江尻川尻目近なりけり

宵闇の巖あら山越ゆるらん

去年より早き初雁の群

ひたぶるに飛驒路思ほゆ紅葉狩

流石練達艶福の詩

亡き妻の嗜み秘めし蘭奢待

家風漂ふ族うむがし

ロッキード裁判今にだらくと

権力怖る腰抜の沙汰

寒極み利鎌とがまの月の鋭くも

たまさか強き木枯の音

ヘリコプター伊勢灣上をはずかひに

八面冷瓏浮ぶ富士の嶺

發ひらく花普賢櫻と稱すべし

燕つばき寄り添ひ巢くう軒下

雛ナオ飾る雲うへびとの上人よそにして

こゝろ潤ふ歌仙卷々

媒妁は好み好まず中々に

三夜さ定かの夢の占

老來の旅出や頭陀も色褪せて

物言ひたげの初夏の諸草

ことごとく餌求む鹿の袋角ふくろづの

此處を樂土に伊賀路大和路

いみじけれ拜おろがみ奉る道祖神

鉦叩きてふ蟲の愛しさ

銀絲さながら星も光りて月の前

乙由のたより秋の暮方

透垣ナワすいがいに新酒の酔を醒ますらん

温泉の煙はろか流るゝ

東ひんがしの山脈高く又低く

太古裏かはらぬ年月もがな

幸さきはへ閑て色香いやます花の蔭

船江里曲に舞ひ遊ぶ蝶

— 満尾 —

露の巻

昭和五十六年十月

昭和五十六年神奈月旬六日門生南千代を伴ひ京の大原の里に吟行しこの一卷をものす

三千院^{みぎり}砌の露に觸れてみし

石洲

常燈わたり匂ふ紅萩

宵闇の蟲の諸聲彈むらん

浮ぶ律詩も旅すがらなり

老來のみやびうむがし蕪汁

雪氣催す遠の山脈

川沿^つひに檜^{ひのき}尻^{しり}てふ團地群

大スーパ一の目立つ進出

濡衣を着るも着せるも神まかせ

ま胸にとゞむ理智と教養

あやにくと道路舗装は長引きて

温泉煙淡く涼し月影

土用入世直る氣色まだ見えず

保身の術に狡き代議士

外交の齒切れの悪さ後手の後手

のらりくらりは國の習慣

松柏を隔てし所花一樹

暮方低く燕矢の如

是は又菜飯田樂久々に

筆おろさばや色紙短冊

かゝなべて曇りがちなる街の中

へりとカーとの音の交錯

鞘當も年に似げなく生々と

素性を黙しあだし仇波

きぬくの伊勢は古市廓跡

今に思ほゆ艶の桃雲

御神饌朝夕を怠らず

石摺りしても分かぬ碑

黒雲に被はれ月の無惨やな

秋黯淡の炭鑛夕張

遠どほにたちまち上る粉埃

赤酒瓢何時もからく

傳へ來し歌仙百韻そこはかと

七十九年は夢の又夢

かゞよひて大原の里の花吹雪

ゆかりありげに琴を弾く鸞

瀧紅葉の巻

昭和五十六年十月

伊賀と大和の國境にある赤目の里を過ぎて

瀧々に紅葉錦をほしいまゝ

石洲

日當るころ鶉しば啼く

待宵の詩篇柏梁體なれや

杖の石突たしかめにけり

雪催ふはだらの山の遥けくも

過疎の村里麥を蒔く頃

家傳尊し黄疽癩に針灸

明治數へて百十四年

ロッキード裁き判決近まりて

腐敗の自民支持の愚を知れ

得ならざり扇の舞踊あでやかに

愛染清ら夏の夜の月

渡れまじ浮名斗りの思ひ川

一九の心解けやらぬとは

木硯は磨るたび凹む癖つきて

氣まかせ旅行西に東に

鎌倉や花に兀座こつざの阿弥陀佛

風も穏やか蝶も静やか

さらナホ波よせる浦曲うらわの薄霞

あぶれ戻りを鞍おろす馬子

俳諧は伊勢派美濃派の互吟にて

無限閑寂不易流行

老いたぬし移り住むてふ檜尻ひのみじり

色紅白の庭の山茶花

燈籠の火袋覗く火焚鳥

思ひあはする夢は正夢

謎らしき言の葉ぐさもみそやかに

掃除欠かさぬ裏の藪神

蕎麥を打つ音の間近き月の暮

一群二群續く小男鹿

猿澤ナウの池冷々と秋長けて

第だい唱しょう句成り脇句試さむ

あなかしこ思ふる萬葉古ことも

御祖の遺徳今に脈々

定紋の三巴を染めし花の幕

驛鈴遠く暮遅き空

—— 滿尾 ——

紅葉の卷

昭和五十六年十一月

昭和五十六年霜月三日下総なる四男宣彦美子夫婦孫隆彦市尾令尾等の來庵あり、久方ぶりに伊勢の朝熊岳へ登りて

曇り日や紅葉こうえふ泌みる奥の院

石洲

常燈淡く秋も名残に

月今宵雁の一群啼きつれて

塩無き海の間近なりけり

春興と題し歌仙を巻くやらん

木地の爐縁ろぞちに匂ふ赤酒

庭つ三步手入床ゆかしき老梅花

土産神へ奉納の繪馬

朝なく、麥飯あをさ味噌汁に

笠は奥山夏を知らざり

縫針に添はぬ情の仇衣

眞まさ幸さきく祈りし夢も現も

あなかしこ浮ぶ師の恩親の恩

月高々と耀きを増す

峰渡る牡鹿牝鹿の初聲乎

里曲さとわはろけくなかせ中稻刈る頃

花に酔ふ赤目の名こそいみじけれ

掬なぶ流れの水も温みて

檀林ナオの連歌なずらひ宗因忌

生垣くゞり雀餌あさる

山茶花の蕾膨らむ昨日今日

豫報を外れ寒波襲来

武に文に戀に生くてふ七十年

亡妻つまの面影しのぶ秋燈

天心や雲の散りぼふ月の色

草葉に光る白玉の露

ロッキード裁き揺がぬ檢察陣

實刑喰ふ偽證政商

事なべて麥酒の泡のそれのごと

簾吹き上ぐ風のしたゝか

夕ナリ近く西空明かく粗山あらやまも

温泉煙引きて千切れては消ゆ

旅すがら蕪村の句を探さばや

己おのがよはひに心やすらふ

美しくも著く果てなき花の道

霞一刷毛歸る諸鳥

寒の巻

昭和五十六年十一月

大阪城にて

雲漠々城も寒かんなる巨石いし黙と

石洲

銀杏の落葉馬場も大手も

百代の興亡ふみ著き史なれや

藜あづきの杖はたまゆらに突く

見はるかす山脈さか界る二日月

里曲さとわくを圍かこむ鹿垣

俗化うてふ祭行事の慣習も

吹く秋風の打うちとけぬ如

縦よしゑやし思やつひ悴れの訝いぶかしや

意地も手傳ふ戀の鞘當

レンタカー今に浮び來琵琶湖畔

雨と日影とこもぐくに降る

斧入れぬ杉の群立美しく

杜鵑一聲姿見せねど

月涼し紀伊の連山突出で、

白き温泉煙徐ろに消ゆ

故郷は有りて無きがの花便

春の別れを漂泊の旅

力^ナ勁くひたすら生くる大揚羽

川面静もり影落す雲

伊勢講に三河道者の旗印

淋しからずや師走の衢^{ちまた}

自民内閣支持率低く寒々と

輕犯罪に問はる判事補

醜草しとくさや蔓はびり極む世なりとも

月は皎々てり光は裏かはらじ

山峽も秋の氣色が濃くなりて

休耕田に竈馬いとどこほろぎ蟋蟀

草葉の人妻戀ふる小世砧

老いぞながらふ夢ならぬ夢

水飯ナリを桑の箸もてそくくさと

風吹くまゝに搖ぐ繪簾

一望の志摩の海原窓先に

霞亭がものす二十八字詩

文祿の花の盛りや偲ぶらん

御空も清ら遊ぶ陽炎

師走の巻

昭和五十六年十二月

鈴鹿峠にて

峠越すと師走の雲居見てゐたり

石洲

岩間を掠め翔くる隼

山茶花の深紅の膏透垣に

夕食の煙立昇りけり

月魂も歌薙親しむ刻なれや

はろけく聞ゆ落し水の音

似非笑ひ折り焚く柴に秋逝きて

わりなさ思へど果は思へじ

慰むる女の清らを白玉と

艶生涯の紫文ひもとく

覺つかな忘れぬ程の悔無きや

ゆふべ出癖を知る人ぞ知る

氏神の合祀もありて夏祭

村から村へ青嵐過ぐ

氣疎けそとけれ鬼館くわん鬼柴しば鬼勇ゆうと

怨詈えんりの的は悪業が因

旅十日床ゆかし朧おぼろの月と花

小腹こはらつくろふ大原草餅

笠ナオと杖矢立も置きて西行忌

雲は行くまゝ風は吹くまゝ

空遠く黒ずみ見ゆる冬の山

土佐路かんとの寒茸かんこ香うむがし

中々に國政浄化望まれず

兒戯じぎにも等し勲章の授受

おほらかや尾花の色と月の色

蟲鳴く里野一と平なり

窓近み海原展け冷やかに

匂ひ袋を秘するたしなみ

愛染の情緒漂ふ萬葉集

想うて逢はぬ戀の奥底

油屋のお紺の墓は大林寺

籬小暗く鴉二三羽

暮際となりてせゝらぎ静もりて

朝熊跨げばすぐに堅神

花もよし七十九年の幸をこそ

終日孫と和む若芝

左義長の巻

昭和五十七年一月

外宮の北御門にて

疾風一陣闇を過りて大左義長

石洲

鉾杉繁み和む初鷄

寒食と詩箋に染めし筆なれや

明治老來いとゞすこやか

遠つ山淡き白きは月の出乎

野菊完し温泉への道

笛太鼓胡弓も妙に秋祭

三更知らず泌みる移り香

身は戀の焰の相を寂光と

色即是空西鶴の文字

懐しむ梅津の村もこのわたり

青葦原に残る月影

飛來り飛行く螢小さけれ

農藥被害消えて年經ぬ

伊勢志摩の道路工事は順調に

二軒茶屋餅匂ひさへ好し

チラホラとテレビラジオの花便

古き眞垣まがきを胡蝶まがきかろやか

^{ナホ}朝霞棚引く中ゆ延曆寺

吾妻あづま偲おもばぬ山號の碑に

旅にして事ども多き憐情や

燭台一つまぼろしもがな

南島の峠を越せば霰空

浮寝伸々集ふ水鳥

文鎮の代りと思ひて石選み

翁年八十極む篆刻

世のさまに臉重きは常ながら

北方領土返還の急

美しき曉あけにも似つる月今宵

砧止む頃小男鹿をじかの聲

露ナウしと萩あぎの瑞枝みずえは垂れしまゝ

船江の里を終の栖と

かにかくに釣道樂は親譲り

御奉行慕ふ事蹟數々

比たぐひなき花前山まへやまの名所圖繪

春の日影を落す文机ふづくえ

— 滿尾 —

初東風の巻 昭和五十七年一月

鞘拂ふ明壽みょうじゅの鏈くわんや初東風に

石洲

屠蘇たそはも食たべ翁年八十

羔無く祈りし彌生の旅路にて

よろづ始めは崇祖なりけり

雲一朵流れを疾む廿日月

關の屋はるか續く荻原

うら悲かなし夜毎に細る蟲の聲

現身げんしん後生ごじやう知るや知らずや

忘れじな大原の里の三千院

心と心通ふみあかし

老來の性力盡くも清きよけかり

古武士の誇り只に消けやらず

もの言はで月影踏みて薰風裡

葦間を低くばん鶺鴒すくりの巢作

寂さすがすえ陶焼く煙はけむ采泥さいでいろ廬

伊勢の山々笑ふ此の頃

爛漫の花に日脚の狂ふらん

五加木飯添ふ運座席上

連衆ナオも春参宮の講仲間

入江離れぬ船がゆらく

暁七ツ八聲の鳥の告げわたり

昨日も今日も強きからかぜ乾風

寝乱し髪こむに凍ゆる思ひして

藤十郎の戀ざれごとは戯事

江戸時代古文書藏す袋棚

俗耳変らぬ門前の街

傲慢の権力沙汰も何のその

愚民政策終止符を打つ

勢田川や護岸工事の進む月

七夕豪雨残る爪跡

見^{ナッ}はるかす波打つ稲穂ひろくと

ヘリコプターは空に輪をかく

一徹乎夕戸出癖の止められず

鍛えもせばや素振り木刀

御屋根てふ今に傳ふる花大樹

蛙にぎあふ正風の里

漢和行 鶯の卷

昭和五十七年二月

鶯語船江里

石洲

結ぶ草廬にしるき梅が香

七律長閑裏

數年客思忘

岫たけわたり雲の片しく居待月

秋果てなむと帯ぶる凄凉

日蓮つの袈裟書侘しみうそ寒く

孤島惹愁傷

ほのやかともしびの閨の燈火濡色に

安らふ夢は戀つくなの償ひ

風熱淡烟散

月涼新樹昌

白き犬足音立てず垣の外

馴人又未妨

ものを書く机代りの古鞆ふるかばん

覺めては眠り今日も旅行く

花影三春路

暖和十里塘

樽ナオ前添鮒膾

幾世めづらに残る扁章

役割の決きまれば冴えし能狂言

元は旗本さすが堂々

情火後朝帳

沈香紉綺裳

雪催ふ湖べの小村ちんまりと

鶏唱隔枯楊

ロッキード事件斷察下されて

穢るゝ金に阿呆あほうの強がり

窓頭孤月彩

壁立萬楓光

外宮ナツとつみやの御池小暗く蟲の聲

繁露只徜徉

幕府法慈悲の相すがたもありぬべし

奉行極刀槍

幽砌花猶淨

霞たゆたふ天の一方

— 滿尾 —

和漢行 紅梅の卷 昭和五十七年二月

伊勢なる船江の里に草廬を結びて

紅梅に吾妻の靈も匂ふごと

石洲

孤寝聽鶯鳴

かくなべて遠の山脈霞むらん

もの幽けさを度る潮風

月砧懷往事

秋笛數歸程

俳諧の道統こゝに守武忌

連衆問三更

夢存燈引影

思逐燭銷檠

榊原てふ温泉の里曲ひそやかに

しのびね近みもらす郭公

夕月饒涼氣

紅友狸毛どれも上乘

しかはあれ豫言の中あたまる摩訶不思議

高倉山を仰ぐ窓先

殘花交色出

春雨御風行

暮ナホ際の蛙荒田にころくと

横ゴム工場目立つ煙突

樽など耳こはも貸こさぬ古こ武ぶ士し風ふう

可憐無限情

靜鐘閑苑滑

深寺玉池平

霜生晴有氣

凍入晝無聲

政財界亂れに亂るうつし世や

神のみ教虚實こもぐ

上樓眉月挂

倚榭菊叢清

老いナウ樂し俳味禪味の橡とらばんご團子

古風たしなむうから實梁

驛鈴の音もかそかに聞え來て

日和續きの美うまし夕映

落花浮澹沱

蝴蝶舞軒楹

— 滿尾 —

漢和行 山笑ふの卷

昭和五十七年三月

昭和五十七年三月十日偶歸省中伴三男紀彦啓子夫婦孫盾彦則彦須賀尾等遊志州賢島英虞灣矣

山笑潮香散

南さす枝に鶯の聲

麗春皆酒興

身世是詩情

野分吹く氣色はあらで二日月

いよゝ寂たり里曲秋耕

火祭や鞍馬を旅の路すがら

無塵曉五更

歌仙行漢和の卷の飽足あきたらず

啜うぶるも宜あつちや老あつちいが羹あつち

夏河洲草續

涼月石牀平

新築の家居雅いへみやびに郊外に

繚繞紫煙清

靜閑襟契樂

幽夢玉簪橫

時ところなべてし盛る花なれや

雲雀も高く白雲の城

醉ナオ莖食はむ千石取の幕臣乎

遨遊罷釣行

江村燈架影

驛路晚炊明

袈裟御前の邪戀けさごぜ今しも傳ふらん

艶えんの王朝秘むる琴笙

風荒き槐えんじゅの空の寒々と

池凍錦鱗驚

八十の身の命尊くいとしてみて

猿衰搜す暗き書棚ふみだな

素月林塘現

秋叢瑞竹生

伊豫越ナウの黒漬鰯くろづけいわしほのぐくと

自然に觸れて伸びし客程

面交忘互對

心友笑相迎

遙望花千樹

蝶も出で舞ふ國の豊榮

— 滿尾 —

漢和行 朧月の卷

昭和五十七年三月

昭和五十七年三月廿五日伴長男品彦眞佐子夫婦孫文尾將彦等經天橋立至鬼崎温泉郷而作此漢和行歌仙一卷矣

朧月天橋挂

石洲

自然の工たくみ和む彌生

硯蓋春叢上

觴杯律呂輕

雲の峯池面に影を宿すらん

鹿の子は親まがと紛まがひぬる程

青アヲによし奈良の都も馴染なにて

夢かよひの通路ぢ笠の山晴

業平なりひらのいにし恋社こせいみじけれ

懸壁五絃箏

草舎蟲吟澹

終宵月色清

添水分明冷

老來うたゝ心盲す

自らの飲食の偈も書かばやな

破障子見つ思ふる舊盟

翳花閑徑倚

春踊榭臺傾

縫れつゝ日の出を翔り大揚羽

遥遥孤岫横

友垣を押退けてまで名譽欲

戦時砂糖の密賣の評

霜解迷風望

凍嚴踏雪行

在りし日の越この旅路は遠とほどほに

山の幸さちとて種くさぐさ々を烹にる

積恨空閨裡

ま胸に秘めし投げの情も

新月青松耀

晚涼白露明

俳聖宗祇忌ナウ

連歌奉戴營

酒癖の善きも悪きも隔てなく

今に江戸期と伝ふ金檠

麗粧花影亂

鬼の崎温泉度わたる鶯

青田の巻

昭和五十七年六月

夕戸出に青田水の音も裏らざる

石洲

螢の光見えぬこの頃

寂び軽み古詩人を偲ぶらん

焼塩かけて残り飯食む

もへ山間遠に黒み初月夜

旧街道の尾花刈萱

秋愁もいさへ忘れふ旅十日

年に似げなく洩らさじの戀

なまめかぬ言葉は流石武家育ち

到来ものへ越後赤酒

氏寺の疊大方さし替へて

何を怖ぢてか犬の吠えつく

深々と霜夜ま白に冴ゆる月

蘆の枯葉のそよぐ一群

いそのかみ古りし石かも御所河原

具教さまの雄ごころぞ知れ

繪にや描かむ歌にや詠まむ花万朶

霞たゆたひ雉子啼きたつ

夏隣伊賀路大和路ほのぐくと

三日乞食の止められもせず

ロッキード疑獄はなべて有罪に

掌てのひら反す如き世の中

由緒ある村社造營近まりて

むかしを今に匂ふ橘

伊勢の海ゆ雲の峯々聳ゆらん

日航機過ぐ遙か西方

後指さるる程の事もなや

老いにまどろむ獨寢の夢

檜尻家竝美しく芋名月

露はもしと萩の袖垣

初雁の風のまにく迷ふ聲

産業スパイ外電の報

己惚と中途半端は度し難く

三人寄りて市虎を成すとや

白日ぞ色香光添ふ花大樹

清らに温む豊の宮川

— 満尾 —

梅雨の卷 昭和五十七年七月

昭和五十七年七月二十日思ひ立つまゝに折柄歸省中の四男宣彦美子夫婦孫隆彦市尾令尾等を伴ひ伊勢國度会郡榎柄浦なる亡母の生家向井氏を尋ねて

網元てふ昔ながらの梅雨土間に 石洲

繪簾かゝり匂ふ潮風

黄鳥の夏も正しく啼くやらん

笥の水の溢れ流るゝ

さなきだにいよゝ冷増す廿日月

とろゝ汁とは俳諧の味

檜笠^ウ独り旅路の秋暮れて

明治の妻を偲ぶ丸髻^{まるまげ}

鬼も出る辻占ひに飽きもせず

寺町在家續く透垣^{すいがい}

このわたり四五百の森といふぞかし

はるか寒々驛鈴の音

月光の夜毎鋭く北風も

窓べ前山雲にかくりて

教科書の検定廻るいざこざや

歴史違はぬ「侵略」の文字

幻覺乎花金色の聚樂第

和み美しく琴を弾く鸞

行春に淀川下る屋形船

御蔭参りの戀は馴合

つきつめし命の果てぞみじけれ

枕繻く夕つれぐ

シャム猫の一向歸る様もなし

ブロック塀に暗き若竹

竝び立つ雲の峯あり動かざる

赤字物かは不死身國鐵

詩や歌や畫等入れおく旅日記

杖はも突かぬ翁年八十

山家無慘暴雨の跡の夕月夜

とだえがちなる蟲の聲々

掃^{ナッ}苔や著き三巴の紋所

書き直すべう「和宮御留」

事多かり昭和も既に五十七年

禁酒禁煙さすが徹底

南島の花に祈らむ幸をこそ

棚曳く霞分け去ぬる雁

和漢行 蟬時雨の卷

昭和五十七年八月

昭和五十七年八月旬日余獨登伊勢國度會郡五箇所城趾也海風吹白髮山氣濕葛衣超然真有世外之思乃作一絶曰三面青山控海灣五輪塔影夕陽閑英雄憑弔愛洲事長使後人思苦難又如次題和漢行蟬時雨得其歌仙一卷矣

任是愛洲城趾の蟬時雨

石洲

隔海聳雲峯

無造作に床几代りの石置きて

采あやとうましく草もそよ／＼

月下三杯酒

秋吟一短笈

重陽陪御宴ウ

旅の衣に残る面差おもて

身を焦す程の想は人知らず

髪を切らむか指を切らむか

筧閑抵古驛

燈影透寒松

凍雲凝月氣

風日遶疏鐘

尋ぬべう友の無きこそうたてけれ

轉移塵外蹤

結ひ直す瓢朱房も花用意

霞の底に船を漕ぐ音

逍遙千里麗

映發八方琮

定かにも庭の訓の現れて

起居俱從容

石女の誹りいらざる言の葉や

古されまじと祈るは神佛

午院餘涼淡

清窓綠蔭濃

黑白文楸上

生物識が孔明の策

山月鹿聲切

倒れ伏すまゝ薄刈萱

近江落^{ナウ}に歌仙卷かばや去來の忌

教科書問題抗議頻々

頰冠^{ほゝかむり}するも浮世の綱渡^{つなわたり}

昭和は長く續く年號

落照花光隱

輕烟蝶舞慵

— 滿尾 —

曼珠沙華の巻 昭和五十七年九月

昭和五十七年九月五日次女清水幹子運転の外車アウデイに孫の麻尾里尾も同乗國道二十三号
四十二号兩線をドライブして

落日は強き力よ曼珠沙華

石洲

國道沿ひに稻田休耕田

有明の旅出も輕き杖なれや

心足るまで連句訂さむ

舞ふ蝶の白妙衣清らかに

透垣近く涼ぐ春水

西行忌ゆかり訪ふべう菩提山

何をか秘めし三十の一文宇

老いらくの戀の閑けさ美しけれ

あえかなる女したゝかの女

そはなべて夢に現に思ほえて

銀杏落葉をあらくくと掃く

寒月の光あまねき石疊

心安うらやまの世の麥林舎跡

覺め眠る華奢風流もありぬべし

孤独さかづきこの頃まや稀

天遠く夕方まけて花つむじ

大湖なゝめに歸る雁かね

新調ナの幟はためく午祭

ねじ棒飴と密言の事

緋の帯を火中ほなかに投なげず心地こゝちすれ

危き逢瀬あからさまなる

温泉も冷泉も浴び山深み

勢せい地ぢ打うちつ五月雨の音

窓先の青葉の茂り黒々と

猿にかも似る似非ものゝ世や

墮落政治老害政治斷ち切らめ

旅人古歌時に偲ばゆ

あなかしこ筑紫太宰の夕月夜

野分弱まり蟲の諸聲

落し水白く流らふ昨日今日

起伏連峯丁度正面

鎗よりも鋭さ見する筆の先

幸か不幸か俺が延命

麗しや長堤十里花吹雪

彌生の空に浮ぶ旅客機

菊の巻 昭和五十七年九月

老い知らで菊に知らるゝ幸をこそ
石洲

庭も窓べも月の光添ふ

湖はろか雁の先陣見えそめて

外出欠かさぬ矢立印籠

八十年の小夜の時雨も俳諧乎

閑々寂々風呂吹の味

雲助と馬子が屯ろの小俣口

お蔭参りは三寶荒神

荷物にはならで錦繪いへづとに

難所峠をやつと越えたり

白樺の若葉の肌美しくて

鮎掛あゆかけの鮎料理する月

物好なに投げなの情なさけを拾こひ來し

流石は晶子戀歌清艶

變らざる堺の空の夕茜

雲雀ひた啼くこのもかのもとに

一瓢の雫も花の精なれや

長閑のどかさまさりおもて面吹く風

ナオこれやこの付句全し宗因忌

はるぐ遠き旅を思ほゆ

今に突なく祖父が形見の仕込杖

枯コスモスに團地寒々

凍な厳し魚影なかげは見えひじりず檜尻がは川

耳なれしたるへりの爆音

時世よな軍備平和に繋ぐらん

地獄極樂色即是空

いそのかみ古りし事ごと夢の夢

少時纏綿天紅の文

島原てふ廓に和む別れ月

くさむら繁み鈴を振る蟲

土濁り消えぬ小川の出水跡

山容淡く八重霧の中

亡き妻に南紀温泉偲ばれて

諷ひもせばや相聞の歌

朝陽ぞ曠の極みを花萬朶

野澤静もり引残る鶴

— 満尾 —

漢和行 大祭の卷 昭和五十七年十月

毎年自十月十五日至十七日以伊勢神宮之新嘗祭期日成伊勢市之大祭禮日催其祝賀行事也

大祭秋成下

石洲

初穂の車匂ふ廣前

月細孤燈酒

渡幽半兩錢

終日を小鴨の群のうまひして

驛うまやはろけく靡く寒煙

又知琴筑曲ウ

更得柏梁篇

さもあらむ山城やましろいでゆ温泉忘れまじ

閨窓玉貌妍

鹽斷に茶斷に胸の置きどころ

憂は逃うまさぬ世をな憐め

熱風吹月上

涼味向雲眠

この頃の山の肌はだへも裏かはらじな

無限卷歌仙

暮れて猶こゝろづくしの花筵

間近う見ゆる蝶の鮮やか

須磨御被ナオ土産みそぎに包む焼蝶螺

閑來物外牽

砂上樓閣と自民内閣けな消做けなされて

日進月歩壬戌の年

素交師術眼

紅友負薪肩

みすゞかる信濃の旅路凍空に

湖べ寒々光る漣さざなみ

好夢 君王笛

歡情 媛女絃

透垣すいがいの露の深きを居待月

殘蛩 北澗田

移ナウり來て冬の支度もそこはかと

文老 用茶煎

政壇 談濁溷

公道 説清玄

神領の雨も雅に飛花落花

燕押し寄せ農事先んず

萩の巻 昭和五十七年十月

昭和五十七年十月念日伊勢の徳川山なる浜地文平老より電話あり早速訪問八重女も交らひ清談迫暮に及びて

ねもごころの望郷の歌碑萩群に

石洲

庭面静もり月の影泌む

山深みたまゆら牡鹿鳴くやらん

ふるされ杉の丸太ころく

大いてふ明治の味の根深汁

玻璃の戸寒く凍空の色

千葉遙けし時には孫の名を呼びて

もやく思ひ白おのづから消ゆ

旅十日漢和も運ぶ歌仙行

國こく衛がの遺跡それと知らるゝ

鈴鹿川此處まがに曲りて瀬を速み

さるとり茨いばら花粉いぼらまさやか

月涼し皆尾の動く牧の牛

風は山風有りや無きやに

老いらくの戀の續きぞ美うましけれ

螺鈿らでんの枕ゆめ夢も現うつも

暮はなつ方門あかりべしまらく花明

たま／＼聞ゆ鶯の聲

利休ナホ忌に利休の詩などまいらせて

玄の又玄道統の妙

寛くわんぎの頭巾づきんは黒に限るべし

嚏はなひることも冬ふゆざれの如

土地ち絡からむ明和めいわの村の汚職沙汰

只ただに虚むなしき弱よわさみにくさ

漏刻の水落ちつくす心地なり

ま澄み御空ゆ溶けし温泉煙

延々と自動車道路舗装され

谷間木がくり猿わたりて

一刷毛の雲も景色乎月淡く

秋のおとづれ風のまにく

さなきだに手枕き横ふ古酒の酔

時事放談の猛者をたへむ

蓋をして置けど二道洩れやすく

割箸割りて何を占ふ

あなかしこ花は御屋根といふぞかし

霞のなびき早き神領

—— 満尾 ——

冬燈の卷

昭和五十七年十二月

朝熊てふ遠山ねら禰呂の冬燈

石洲

木枯やまず著しるき潮の香

御公儀の書類大方整理して

組士の裔乎それと知らるゝ

尊くもかくは静かに十三夜

幾世經し里熟柿うれがきの里

稻架いな々々を見えつ隠れつ渡鳥

守武祭今日のいとなみ宮

さればこそ世の中百首そらんじて

物や思ふの情ひたすら

綻ほころびを縫はれし仕種しぐさづぼし圖星なり

消えては燃ゆる背戸の蚊遣火

青簾風にあふられ月光も

護岸工事の音が響かふ

清流へ戻す悲願の勢田の川

此處は神領其處は天領

竹藪をなぞへに落花一しきり

のどかうらゝか蝶々の空

杖ナオに笠か描かき人びと知らで西行忌

伽羅きろ焚いく時ぞ居士きし顔となる

高飛車も惚れし弱味にでき難く

立居たぐ振舞なまはし規ならす習は慣

雨あめげ雲ゆふべ催もよほふ夕ゆふべの寒々と

鎮守ちんすの森もりへ來き啼なげく梟ふくろう

波のごと温泉の煙眞白にぞ

ロッキード事件今もだらぐ

自民黨のあくどさずるさ慢性化

心冷えずよいきどほり猶

旅すがら大恵那遙か三日の月

鹿垣沿ひを閻魔蟋蟀

到來の新酒に樽良の在おはされて

幽玄極む伊勢派俳諧

この一年生命賭くてふ事もなし

仰寝片寝の欲ほるがまにく

天つ日や光かゞよふ花大樹

なごむ國土くにづちそよぐ春風

和漢行 御連歌始の卷

昭和五十八年一月

匂ふかに御連歌始伊勢派なる

石洲

蓬萊答 太平

徙り來て新居の野鳩よく昵れて

溝川清み汐のさしひき

山月高低影

草蟲斷續聲

艶文西鶴忌

誠しあらば極道もよし

積善に幸をもたらず共稼

煙草やめたり酒はたまさか

江閣笛音聽

石城詩興生

炎暑松間月

埃あやしく麥秋の頃

明日香なる古^{いにしへ}人を思ほひて

清ら安らに旅ゆくらんか

花發長旗靡

水温短棹横

晚霞^{ナオ}忘歸處

七難かくす紅と白粧

願かけに出雲の神と伊勢の神

鉄砲^{てつぱう}和の鮒^{あへ}は名物

雪波回頭濶

寒塘轉眼更

時に又自棄てふ相ありぬべし

諷ひさぶらふ餘技の催馬樂

過去現在惡臭消やぬ自民党

政治の不信修羅の八巷

有愁風月動

無恙露眠程

沙岸秋同晝

郭門茗待烹

あなかしこ利休が心見ゆるかに

美しく對す遠の山々

養花翻粉叟

佳日囀倉庚

— 滿尾 —

蓮華田の卷

昭和五十八年三月

旅もよし明日香あすかの里の蓮華田に

石洲

彌生の山は墨繪すみえさながら

恙無く燕一族引連れて

自在の茶釜みやび雅みやびなりけり

居待月こぼ灑るゝ露も歌種乎

野分の跡ゆ雲の裂さけ見ゆ

禪房ぜんぶや魚板響かふそゞろ寒

千年の歴史一握の土

觀光はいよゝ俗化を辿るのみ

世間話に訛りなつかし

嫁の座かざの笠かさの奥山夢の如

炎暑ものは消やぬ戀情

遠蚊火に昨夜も今宵も月の光

一朵白雲疊まりつ行く

立ち並ぶ石燈籠の御成道

鴉の聲の心安げなる

連休日旗日と花も咲き榮えて

床几代りの根瘤かげろふ

畏けれ御陵詣に夏隣

琵琶の大湖目と鼻の先

愛は無上詩文構成奔放に

噂知らずよ逢瀬思ひ出

艶と澄む川田の大人の運命とも

蕾ふくらむ庭の寒菊

終日をシャム猫な昵なれて日向ぼこ

國會空轉テレビ放送

親しさは南ア砂漠のブッシュユマン

左程かはらじ古代現代

月白のひろごり度わたり霧重く

黍はすの葉摺れと落し水の音と

俳諧ナウの柚餅子ゆべしの巻は漢和行

磨かれ極む押韻おふいんの妙

隠おたしやに潮風匂ふ團地群

御空大きく鳶輪かを畫く

老樹なる花長堤の花なれや

土筆の影も伸ばす日の脚

— 満尾 —

花の巻 昭和五十八年四月

昭和五十八年三月三十日門生南千代女の母君古野氏御逝去の報に接して

可惜^{あたら}しや花も見やらず寂光と

石洲

春雨煙りいたぶ鉦^{かね}の音

山遠み雁の一群歸るらん

いとゞ清けき枝川の水

さなきだに露の冷ます有明に

衣打つてふ里^{さと}曲^{まが}ちんまり

此^{こゝ}の秋も赤字列車を走らせて

衆参ダブル選挙もくろむ

閣僚にヤクザの絡^{から}む汚染帯

手形割引あからさまとは

假の世の假の宿りを思はめや

自然に和み繁る芦原

温泉ゆの山は涼しさ早き月の色

昨日けも今日けも雲一つ無し

炷たき籠かる香かうの漂たひ夢現

妖あやしくえがく白玉あの肌

うらくくと御屋根櫻いの息吹いぶき猶

垣かき穂ほに休み翅はたむ蝶

俳諧ナホの旅路は丁度夏隣

差合さしあひあらで翁年八十

御維新の歴史は遠く去りゆきて

心温こもる人の平等

庭園ていも館やかたも由緒たしかなる

八手はてまた俣川まのわたり寒々

鴨竝び風に逆ひ動かずよ

夕日の朱あけの染みてうるはし

情炎の坩堝るつぼに投ず歌もあらめ

奈良朝俣いらつめぶ郎女の戀

老松の小山さながら月遅く

亂れて脆もろき草の葉の露

餌ナリ求めぬ鹿もあるなり秋神事

舊幕時代おぼまつ掟おぼまつかはらず

去る者は日々に疎うとしといふぞかし

祖母母形見の文机ふづくえの邊に

ゆくりなく花を餘よそ所なる花便

古野ふるの淋しみ春の黄昏たそがれ

五月の香の巻 昭和五十八年六月

昭和五十八年五月九日姪中村和子の二女貴美子伊太利より歸國し一ヶ月間滞在の由にて來庵す

家苞いへづとの伊國銘酒も五月の香

石洲

窓まどへ美うましき金色きんいろの薔薇ばら

おぼくし字引學問笑ふらん

峽はざま 笈まの遠とほつ聞ゆる

待宵まちよに動うごくともなく雲くも一朵

古代こくごのまゝをを残のこす鹿垣かき

村役むらやくは毛け見みの供方もてな持成もちなりして

露つゆの濕しめりに重おもき蓑笠かさ

勢田川せいでんがわや種々くさく名付なづけく橋はしの數かず

門前町かどまへまちの賑にぎひもがな

平仄へいそくもかまはぬ詩等うたらうんざりと

恥かき捨ては彌次喜多の常

乍さりながら去月凍いてながら冴さえながら

凄味を添ふる冨の音

今は昔くもわ廓ひやかし島原素見こに

醒めもこそすれ轉寢の夢

花の旅花の遅速の寂菜

温泉いでゆ間近う燕群飛ぶ

春霞ナ送電線の鐵塔に

祝部式土器出でし塚跡

磯もとのとゞろの浪も黒々と

欺瞞逃背うつし世の相

侘びしさをほのかに覺おいてゆる老心こころ

鮎鮓の味俳諧の味

近江路も眞夏まなつの日射しすべなくて

参院選舉只に低調

衆はこれ朝三暮四と譬たとふなり

いよゝ苔むす中庭の石

爽やかに雲の散りぼふ居待月

山の尾上乎鹿の初聲

昭和ナカなる次の御遷宮六十八年

まだその儘に凸凹の道

ようせずば隠しおほせぬ隠し事

吉とは嬉し割箸の占

誇りもて色香こよなき花なれや

海の彼方も長閑天麗

稻妻の巻

昭和五十八年十月

伊勢路より雲巖くもひだ明り稻妻す

石洲

風もしたゝか匂ふ焼帛やきしゆ

金槐集居待の月に誦よみずらん

威なほし美うましの文字をまざぐ

山近み海礁いぐり遥けく大霞

縫ぬいれつ去いんぬ黄蝶白蝶

客中ウの四寶は頭陀だに西行忌

藪やぶから棒ぼうのやごとなき胤たね

戀こひの畏おそ裏うらかく術すべもありぬべし

太息といきを洩もらすテレビ映像

擊墜きくたいに謎めいの深ふかまる大韓機

千鳥亂舞のサハリンの沖

灰色の御空や月も寒々と

乾肴ほしきかなあり酒を酌むべう

或時は催馬樂さいばらめきし歌詠みて

涼菟乙由は御師おしの代官

穴賢あなかしあしたゆふべの花の光てる

大河溶々温みそめたり

春ナオの虹摩耶まや六甲を一跨ぎ

空耳そらみみなれや犬の遠吠え

焙ほいろして吞べば柴茶の香も親し

痴話と口説と想ひさまぐ

身の中ゆ忘れ難きの女ひとの影

寝押しねおしの効かぬ帷子かたびらの皺しは

三尺の庭面夕映え水打ちて

ラジオニュースを流す隣家となりや

口疑獄くさぎの前の宰相實刑に

とまれかくまれ醜しじのうつし世

奈良七重名の夜の月の草枕

諸虫勢ひとしほい調べ一入

濡縁ナウに見ゆる山田の落し水

葭なはしの煙うすらむらさき

與野黨は争ひ絶えず繰返し

破戒無慙いましを警めとせよ

藁ひこげえも年毎盛る花堤

いさゝ冷もつ彌生の雨

— 満尾 —

冬雨の巻 昭和五十八年十二月

伊勢船江の草庵にて

冬雨や一燈閑に古書堆裡

石洲

不老と呼ばふ芋粥の味

柴垣へをりくひたき鶴訪れて

淙そくぐ谷水ゆたかなりけり

月淡し外山の禰呂ねろの起伏おきふしも

糸萩瑞枝露みづえは紫むらさき

^ウ神領の祭行事の初穂曳

無智を承知か地名改稱

及ばぬは過ぎたるよりは勝るべし

茶斷鹽斷ひたすらの戀

浮ぶてふ夢の夢こそ嬉しけれ

温泉めぐり今に缺かさず

夕月の明るさ猶も涼風も

夏野が原へ續く山裾やますそ

衆院選惨敗啣かつ自民黨

驕り極めし果ての廣報

これやこの和み盡きせぬ花の色

蝶の御空乎うらくと舞ふ

木曾路なる霞濃こからず薄うすからず

思案に乾く磨しし硯石

藤村の反古の皺伸す氣まぐれに

恨みごとなど見透して言ふ

老いらくの逢う瀬華はなめきたためらはず

明方弱む木枯の音

猪矢來待場に勢ふ紀州犬

自動車道路工事着々

足引の山の籠居飽かなくに

新酒を酌むも深酔はせず

月天心野分叢おどろして

ふりすてがたき鈴蟲の聲

伊丹派となれば放膽鬼貫忌

誠の文字に生きの鋭さ

この頃の目覺め安らも旅すがら

温泉煙はるか湖の靜寂

白妙の雲とまがふる花の蔭

去年より殖えし燕一族

——滿尾——

下總歌仙 殘雪の卷 一

昭和五十九年二月

船橋市なる四男宣彦亭にて

田喜野井てふ名はも美しく殘雪も

木立坂道鶯の聲

石洲

蓬餅うからやからに配るらん

定家机ていかぐえはなじみなりけり

雲壁の厚さ薄さの居待月

萩原遥か靡く温泉煙けがら

秋深あきき陸くがの小島をしまの旅幾日

頭陀の袋に歌仙獨吟

老來の戀は消やらずにじみ出て

歎なげき忘れじこのしぬこそび社

靜かなる風の流れも折々に

森林公園緑まさやか

切り通し抜けければ涼し月の光てる

辨天祀る元祿の文字

生活度汚染度浮ぶ印旛沼いんぼぬま

政治倫理をほざく政治家

しかすがに霞とけあふ花の雲

自然たが違はぬ蝶の羽遣ひ

如月すきの厳しさ續く異常さに

八十路の翁安らぎあらず

事業とて二度の倒産わりなしや

養生飲みに過ごす陶々酒

什麼そもさん生と無言の行もよかるべし

透垣すいがい近べ鵓ひたき飛ぶ色

夜つ引きて困止まず吹き荒れて

大古さながら大湖ひろく

赤彦あかりこの故郷思ふる歌しるく

夢にさまよふ信濃細道

淨きもの乎寂しきもの乎月今宵

棕ひびの葉たうぶ小男鹿の群

傳ナリへ來ぬ五穀豊穰の村祭

香まだ濃あきだるき空樽の中

あはれ聞く長距離電話しみぐくと

眞珠またまにひそむ女ひとの妖あやしさ

春や春花の臺うてなを稱うたふらん

燃ゆるとき又昇る糸遊

— 満尾 —

下總歌仙 萬緑の卷 二 昭和五十九年四月

下總に初夏を迎へて

萬緑や老いさぶ息吹たしかむる

石洲

狹庭行水夕月の影

遠つ方螢火玉にまがふらん

驛路の鈴乎聞え來るなり

そゝくさと風もそよつく薄原

焼帛煙ひたくくと這ふ

青土よし奈良の鹿寄せ旅すがら

笠の奥山眼路に對いて

思ひ猶今に流るゝ相聞歌

恨みはつくく密言もがな

徒事のうすら白粧なつかしく

餌求む池の鴛鴦の群

寒月に神宮領の杉木立

延喜式とて由緒尊し

もの書かむ心安らの墨の色

幾起伏を大いなる寂さび

西山は須臾の明るさ花吹雪

温泉宿わたりを圍む春水

宗長ナオの尺牘せきとく掲げ宗因忌

味は上乘田螺味みそあへ噌和

奥の手に裏の裏ある駈引や

八卦はっけ神籤しんせん善きも悪しきも

三千里夢の通路圓やかに

残照淡く青簾越し

蚊食鳥入江に船の灯もつきて

疲れなかく生活の糧

民主主義脆弱体制正すべう

老麗若醜黃門が説

見る程に去來の雲と月の光

黍の葉末の露も散らずよ

日々なべて門田に鳴の羽の音

眠りもあへぬ烈し秋風

事爲さぬそのたまゆらを本とせむ

此處下總のわび居馴附かず

大山も小山も花の曇り癖

眞晝靜かに揚羽舞ふ也

下總歌仙 薰風の卷 三 昭和五十九年五月

船橋市なる四男宣彦美子夫婦と孫の隆彦市尾令尾等を伴ひて

薰風裡九十九里濱ドライブす

石洲

草間にからむ晝顔の花

折やよし詩歌俳諧に朱を入れて

再々啜る澁茶なりけり

連峯の空は小暗く月今宵

馬塞垣ませがき古び軟なならかの露

ほのくゝと郷愁そゝる秋祭ウ

お伊勢うどんの味は忘れじ

暮つ方逢瀬啜の道はるか

十年情とせなさけの彩あやをまざぐ

己が手の諸相占ふたはむれに

窓べ寒々北斗七星

此の日頃凄まじ霜のひゞく音

林野の破壊政府當局

しばらくは冷笑類にのぼるあり

盛るさかしら悔くちふおろかさ

静寂の花も朧よ月も亦

湖岸を沿うて歸雁一群

南朝ナホの平山城趾春耕に

親房公の哀史思ほゆ

鋭くも身に迫り來るものありて

寝汗しどろに疲れしたゝか

うば玉の暗夜の中ゆ初螢

水上わたり風のさやく

ゆくりなく杖突くまゝの一つ道

天領しのぶ名所圖繪也

現世や因縁和合避けられじ

今も見けん戀の炎を

枕べの玻璃戸美しく月の出に

育くみ愛でし鈴蟲の聲

北嵯峨ナウの熟柿うれがまたう食べ去來の忌

雷らいぢん陳消やる老いを憐れむ

創造す境さかひ自づといやふかく

教えぬものゝ術すべの尊さ

これやこの春のならばし花萬朶

霞かくれに遠の山巖

— 満尾 —

下總歌仙 水無月の卷 四 昭和五十九年六月

市川市なる長女永崎典子と孫元彦を伴ひ成田山新勝寺參詣途中

水無月や成田街道東南風止まず

石洲

飛行機遠に雲の峯立つ

一瓢も四寶も旅の友をして

出湯香走る窓べなりけり

細竹の白露しとゞ待宵に

尾上つゞきを小男鹿の影

亡妻思ふる十年の前の大文字

悔ゆと言はなく幸と言はなく

丑の刻尿起癖もありぬべし

幾日の勞れわびすみの里

何鳥ぞ礫の如く透垣に

冬牡丹は幽かなるかな

夜明けなば月ほの明り寒々と

慰む女ひとに歌もあらばや

過去の艶海えんの底めく眞珠まだまとも

忘れ難きの事を描きて

神風の伊勢のたよりは花便

豊の宮川鮎上る頃

山城ナホに山田にかこふ大霞

安寝やすいはつく旅をこそせめ

サラ金の業者倒産いちじろく

國會空轉長期見通し

石に對す詩人の言葉文字の冴え

冷しうどんも待ちてあるべう

螢一つ玻璃戸をちらと過ぎしまゝ

是よたまゆら虚無の相乎すがた

老いさびし亂れ心地こゝちは美しく

夢も溶けあふ温泉まればや稀

楠榎只に静もり三日の月

寺領を隣り刈田果てなし

低ナラく飛ぶ勢たがい違はぬ秋燕

房總かけて空は雨雲

三千風の三千句詠む時飽かず

身心鍛ふ刀鎗やもがな

ことわりや花の白きぬまさまやかに

山河迢々和む春日

下總歌仙 青葉の卷 五 昭和五十九年七月

昭和五十九年七月一日船橋市なる三男紀彦同道共立建設KK関係のつくば科学技術博覧会パビリオンでんでんINS館新築工事の現場を見学し、筑波連峰遥げく望むその規模の壮大さに一驚す

科学殿堂こゝに築かれ青葉光

石洲

露はも涼し國土の幸

水豊か咽喉のみどの乾き潤うるほして

十七文字を空間に書く

月前の雲脚疾はやみとゞまらず

薄の下葉鹿臥しかせし跡

あなかしこ香取神宮秋神事ウ

減りもこそすれ杖頭の錢

思ひ出は渡りもしたる泪川

老いの華はなめく恨み洗はむ

狂ほしき事のみ多き現世や

月をとよもし激つ北風

菊枯れて籬に沿うて相寄りて

大門構へ萱葺の邸

成田てふ昔ながらの街道筋

五機編隊のへりの爆音

常磐木へ花紅白をかざしもし

惜春詩情勃然と湧く

うつらく矢切の渡し揚雲雀

わび居も昵れて既に半年

あが運命雲の行方と裏らざり

調子氣づかふテレビアンテナ

さなきだに政界浄化中々に

弱肉強食古往今來

城山の校舎も見えつ五月雨

馬鈴薯畑に隣る茄子畑

一群の海礁いくりは淡くたゆたひて

うねり飛沫しぶきを黒鷯動かず

自おのづから有明月夜白々と

行脚宗長柚味噌相伴

そゞろ寒連歌玄妙極むらんナリ

待つ暮近みすべにける鐘の音

温泉ゆに觸る髪さやの癖くせづきなつかしく

青磁の色の戀の片々

越えて來し花や嵐を幾いくそ十度たび

揚羽安らふ庭の生垣

— 滿尾 —

伊勢菊の卷

昭和五十九年九月

伊勢船江の草庵にて

伊勢菊に伊勢俳諧を誦すべし

石洲

源氏窓のべ淡き月影

人造湖自然と和み雁群れて

風も程々空に吹かるゝ

絶えまなく温泉里曲の雪煙

寒さ半なかばをこれやこの行かう

定じように入る誠たのしみ酒みづき

幼時思ほゆうから實梁

日の御門前と私帖しるは著く文字の蹟

黒谷山ゆ木魚音して

大いなる杉群かく隠り大い鳥

たま〜近み夏雲の彩あそ

月の出の遅きを蚊火は小火ほやの如

難物承知婿の縁談

幾曲折夢いくまがりとし言はめ佗しかり

遍路の心えこそ忘れず

朝々の水面に浮ぶ花ての光

殿様蛙聲するや稀まれ

天ナオと地とかくも整ひ彌生よひ盡

電子の工場新しく建つ

政界は又か〜の茶番劇

小粒揃ひは裏かはらざりけり

呆あきたる神宮家てふ偽家系

郷土史實を説けばいやさら

生きたりな明治は遠つ根深汁

足袋もはかずに過ごす一冬

印旛沼手賀沼釣りの思ひ猶

見え分かぬまで多の秋草

錦雲しましいざよふ待宵に

野分の埃消えぬ狹庭べ

いたるべく逢瀬大原の旅衣

この人妻の艶の眼差

點長に猫上げますと近衛流

釜の沸ちのそれも亦よし

たゞ祈るは久遠にさかふ花なれや

霞いろ濃き曙の空

凧の巻 昭和五十九年十一月

昭和五十九年十一月廿五日門生川端楊心を伴ひ松阪市松ヶ島へ移りし同門生前田南天を尋ねて

南面の庭三尺を木がらしす

石洲

明く清らに咲くは寒菊

いみじけれ水無瀬の連歌あやかりて

魚籃釣竿いつもそのまゝ

月今宵過疎の聚落眞寂しく

行方わかたぬ小男鹿の聲

艶隠者ウツサイインシヤ只にあえかに西鶴忌

戀の懺悔も君のみが知る

浴泉ゆ夢の白粉ほのくゝと

幾起伏を思ひかへして

逐はる如住みし手狹の部屋ぬちに

今年の夏の老いや衰ふ

月影もはつ／＼渡り螢火も

一級河川勢田の改修

山々の容美しくおのづから

炊煙昇り村ありどころ

小鳥どちたま／＼紛れ花吹雪

七重に八重に霞色濃し

邊津浪ナヘツなみのうねり寄するも春最中

目向ひ遠く安乗燈台

今に傳ふ情ほだしの走りがね

襟の黒縹くろしゆす子句ふ丁字香

むらぎもの心環こごのそれの如

玻璃窓徹とほす霜の冴々

落ちなんと冬至迫暮の柑の實

忽ちいよゝ響く雑音

後南朝史はも著き動亂期

京の橋本伊勢の橋本

旅すがら月天心をいざよひて

欲りす山酒澁鮎の味

民主主義秋季叙勲は逆行沙汰

大臣呼稱もいまだ變へずに

憤り耐ゆてふ自棄の煩ひや

萬葉集の歌のするどさ

廣前に何を祈事花の光

鯉木竝べそよぐ春風

— 満尾 —

初懷紙の卷

昭和六十年一月

遅々もよし牛の一步乎初懷紙

石洲

側金盞花飾る床の間

島山ゆはづれに海礁あらはれて

古代うつろふ自然なりけり

しけ後の雲なほ疾し廿日月

添水の音は遠くかそけく

思ひきや木曾路の旅の秋彼岸

コスモスイとゞ眼底に澄む

萬葉に老いを揺さぶる相聞歌

運命占ふ痴愚の虚しさ

あの日この日忘れかねつもほのぐくと

鮎た食うべ物を書くべう

月涼し大竹林濡色に

玉丸城趾吹くは何風

すさまじき亂らんに徹する後南朝

見果てぬ夢のうっし世やこれ

天明笑あけゑまむ上枝ほつえ下枝の花もがな

燕つばくろ來そめ高く群飛ぶ

彌ナオ生山いはれ由緒いこぼたれ團地化に

有名無實風致區の文字

羚羊かもしかの過保護の被害後手の後手

兎にも角にもテレビ情報

謎なぞめきて連合政權解きがたく

長尻談議菱なへてふはく

雪空を散りぼひ過るものゝあり

凍えうすらぎ風止まんとす

下總のわび居の戀歌なつかしみ

いよゝ温もる女の妖しさ

引眉の月の面こそ神秘なれ

くさむら深み露のしがらみ

冬隣河川工事もはかどりて

人口十萬御はらひの町

茲に見る守武宛の宗祇状

足利文化在りし日の如

濃き淡き色香を稱ふ花大樹

霞かくれに南の彌呂

雪解の卷 昭和六十年二月

伊勢國度會郡田丸の里を過ぎて

雪解や延元城趾劃然と

石洲

土筆の影は伸びてたくまし

鶯の初音たまさか聞ゆらん

到來ものゝ地酒なりけり

裏戸口苦舟かゝる居待月

野分の名残たゞに靜寂

伊勢^ろ派てふ俳統^し著く守武忌

「新秋津洲」成り歌仙五十卷

女^{ひと}が事夢の續きのひそやかに

さやりたゆたふ事もまぼろし

明日は明日老いのわび居も意とはせず

かゞやく眞珠またま秘むる胸底

久方の避暑や温泉の月の色

螢火しまし光りては消ゆ

故障か給油か暇にへりが舞下りて

向ひ横たふ筑波連峰

うるはしくいよ／＼募る花の雲

彌生なかばに科学萬博

旅ナオなれや長閑うらゝか尊けれ

吾しりつとが陰言有るも亦よし

この浴槽ゆぶね君が黒髪くろかみ偲ぶ夜半

戀句の案じ浮び來ぬれば

合作は後程構圖むつかしく

好物もなか挽茶餅入

峠口國民宿舍ちんまりと

霰もまじる筋あらし雨

寒鴉鎮守の森ゆ騒ぎ立て

遠からなくに磯際の香

待宵の流浪の思ひ清しくも

石翁ひとり鈴蟲を飼ふ

柿畑ナワ籬ナワ續ナワきに黄ばみそめ

機影はろけくひんがし東ひんがしの空

いくそたび天氣豫報は外れがち

何を目ろむ孤狸の算用

まこと世の憂うれはし花も反そむげばや

霞の中に笑ふ山々

— 満尾 —

夕月の巻 昭和六十年八月

昭和六十年八月念五日下總なる三男紀彦亭に杖を停めて

夕月や出窓にかゝるキウイの實

石洲

初雁見えし南みなみの方

歌仙行秋もたけなは朱を入れて

旅の細道魅せらるゝなり

風強くはだれの雪に吹くやらん

山影落す冬の大湖

十年前亡つ妻と詣でし延暦寺

手觸り飽かなく苔の深きを

淋しげに親子鴉はつくねんと

銅鐸出たる壑あちき田の隈

温泉村湯けむり遥か糸引きて

糠星消ぬがほしけやず涼し月の面

汗襦袢乳の香もあり白粧も

悵氣の角は折れぬ儘なり

何につけ昔思ひ寝なつかしく

玻璃戸を徹はやす疾はやき雲脚

一しきり硯の海の花吹雪

蛙諸聲勢ふこの頃

天領ナオ乎水口祭おごそかに

菜の飯添へて田樂を食はむ

掃き癖は長刀反ながなたぞりの竹箒

戀ほのめかすいぢらしの所作しよさ

口元もくぐほ壓おさも母に生きうつし

翼みづれまじりの雨の故郷

新幹線軌道妨害寒々と

ゲリラ策戦ラジオテレビに

國政の止どまり知らぬ貧しさよ

明治維新史今もほのく

上弦の月天心に仰ぐべう

七草繁み秋を深めて

御手洗ナツミの川や由緒の落し水

かそけく聞ゆ鹿寄せの笛

竹外翁この程銘酒おくられて

偶感とあり二十八字

猶奥も紛まがふ色なき花大樹

霞たゆたひもゆる陽炎

— 滿尾 —

寒波の卷 昭和六十年十二月

下總の寒波わび居もよからずや

石洲

老いさぶ命風呂吹の味

山深み杉生洩れ日は幽かにて

小鳥餌あさる氣色ありけり

待宵に遠べの添水かろやかに

薄がくれの野菊完し

參るべう鹿島鹿取の秋祭

旅を戀しみ女を戀しみ

いつはりの世相由々しく艶も亦

己が齡も経るがまに〜

丑の刻史讀む習不圖失せて

玻璃戸を繰れば螢飛交ふ

月の色青田の色の親しけれ

棄て酒いさゝ此處に灌がむ

門生の詩稿圈點猶萎えず

時は過ぎ往々

お伊勢てふお屋根櫻の花便

眞晝間一つ繁き虻の輪

麗はしく國境遥か淡霞ナオ

川原砂道踏み心地よし

瘠せたりと思ふ事ありこの日頃

愛憎和み幸とせむ吾になご

物なべて忘るゝ術の清しさやさち

時雨の雲の立ちも離れずすべ

片寄りに落葉散りぼふ大榎

信濃の旅路泊る本陣

窓近べ嶺^{みね}高圍む湖靜か

鬼貫句境澄み來激しく

柿餅と柚餅子^{ゆべし}喰はせよ月今宵

野分の跡の蟲の聲々

松林^{ナラ}も籬に續き冬隣

テレビ新聞流す情報

日米の貿易摩擦盡きざらめ

誠しあれど秀^ほ刃^{やいば}の如

藥^{ひこば}ゆる花を見添へて鮮やかに

白鷄遊ぶ廣前の春

和漢行 家の春の巻 昭和六十一年一月

下總なる四男宣彦の住居すまひこのほど新装成りて

崇たかくしも木の香漂ひ家の春

石洲

椒酒賦新詩

濃く淡く燕湧き立ち飛ぶやらん

あるかなきかの風がたまさか

葉聲依又月

蟲語瘦於絲

冬隣紫源氏葉つして

逢瀬外さぬ縁の綾卷

一燈嬉好夢

言葉少なに泌むる胸ぬち

何となく伊勢の消息聴かまほし

もゝへの山の青葉若葉も

夏月徐々動

湯烟搖々移

うらぶれの旅にはあらね幾^{いく}そ^そた^たひ^ひ十度

いやさら思ふ良寛が歌

花影水光度

蝶衣隨處宜

遠霞^{トキ}全似畫

吉野會式も斯くて過ぎゆく

僥倖成名索

自民内閣派閥内閣

望むべう野黨^{ちから}の力あらゝかに

寒漏有誰知

雪解の紙漉きどころ楮こうその香

夕日小さく今い没いらんとす

素交雲意態

紅友杖筇支

待宵に空はぬれ色静もりて

芒の靡き海をはろぐ

四邊ナリ秋冷至

千里雁來時

ぬばたまの黒髪かな愛あし妨さまたげじ

ながらふ戀うらやも心こころ安やすげなる

ほのぐと花みやびに雅みやびの野文臺

春景暮鐘遲

— 滿尾 —

あとがき

故あって、父は昭和六十年の秋伊勢を離れ、三男紀彦、四男宣彦の住む、下総に居を移す事に成りました。しかし、何につけても、想いは伊勢に寄せ、塞ぎ勝なる心を、日々専ら「左義長」を完成すべく、句作に没頭しておりました。父の口癖は、「死んでからでは遅い、生きている内に孝行しろ」でありました。

昭和六十一年の正月明けの十一日、茅屋から四〇五百米離れた三男の隠居所より、原稿用紙を折半し二枚に繋いで、我々無知蒙昧な者に読める様にと、朱で振り仮名を付けた草稿を持つて来て呉れました。父は何時になくニコニコとさも嬉し気に、「これで全部じゃ、完成した。」と、満面笑みを浮かべて言ったのでした。それから僅か十一日後の、昭和六十一年一月二十一日、例年に無く寒い朝、突如逝ってしまいました。

父は宇治山田商業学校一年生の時、剣道試合の際、横面を受け損い、鼓膜が破れ、以来耳が不自由で御座居ました。挫折しかけた父を支えたのは、小学校四年の時から、祖父実幹に教わっ

た俳句であり、大叔父海獄和尚の訓導であり、姻族松木時彦さんの指導にも依る、神都伊勢の「家学」ではなかったかと思えます。

その父の遺して逝きました、「左義長」の草稿を出版するのは、私達子供のせめてもの務めでありますが、情けない哉、誰一人父の風雅を解する者はいません。その草稿を発刊までに成し遂げる事の出来ましたのは、父が終生の友人であり、又門人でもある前田南天氏の一方ならぬ御尽力の賜であります。また、父の生前お近づき下さった、伊勢出身である、筑波大学教授奥野純一先生を訪ね、著書の原稿を持参し、序文をお願い申し上げました処、心よくお引受け頂きました。先生のお骨折に対し衷心より厚くお礼申し上げます。

故人の喜びを察しますときに、父が諭す「死んでからでは遅い」の言の葉が涙と成り、「峠ノボに陟ノボりて父を瞻望センボウす」も間に合わず、霞む目頭に胸内ムナヂは痛く合掌あるのみでございます。

平成三年 正月

四男

遺族代表 橋 本 宣 彦

謹みてしるす

不許
模写
複製

印 検

著者略歴

明治三十五年五月十九日三重
県伊勢市に生まる。

主要著書として、『俳諧 芭蕉
の筆』、『山田奉行沿革史』、『雲
夢書齋詩鈔』、『俳諧 陽田の土』
『正風俳諧 新秋津洲』、『正風俳
諧 左義長』等がある。

平成三年一月十日 印刷
平成三年一月二十日 発行

(非売品)

著者 橋 本 隆 介

発行者 橋 本 宣 彦

〒274 千葉県船橋市田喜野井五十二八一七
電話(〇四七四) 六二一六六七四

印刷所 千卷印刷産業株式会社

〒516 伊勢市宮後二丁目二九一四一
電話(〇五九六) 二四一四一三一

嫁ぐ日の再婚神とし梅茂翁

考ふん和をと包む責を

度々其名を出るの古巻新巻

流む音流くま毒の四録

いふしむたふの巻甘ひ家の巻